

## スーダン研究の新しい風 来日した二人の研究者のプロフィールから

栗田 禎子

今年で3年目に入った文部省科学研究費プロジェクト「イスラーム地域研究」（正式名称は「現代イスラームの動態的研究」）の一環として、一昨年来、多くの外国人研究者が日本を訪れているが、その中には当学会とも関連の深いスーダン出身の研究者、それも最近国際的に高い評価を受けつつある気鋭の論客が含まれている。今回はその中から、共に昨年（1998年）来日したハイダル・イブラーヒーム・アリー氏（社会人類学者）とアフマド・スイキンジャ氏（歴史家）の二人を取り上げて、その横顔を簡単に紹介してみたい。

### (1)

ハイダル・イブラーヒーム・アリー氏は現在50代のスーダン北部出身の社会人類学者。ハルトゥーム大学で学んだあと、ドイツに留学し、自らの出身部族でもあるシャーイキーヤに関するモノグラフで博士号を取得している。その後、湾岸地域のアラブ諸国の大学で教鞭を取ったりしていたが、次第に本来の専門である社会人類学の研究に留まらず、政治・歴史・文学等、多様な分野にわたる「スーダン研究」の（スーダン人自身の手による）組織化・発展に関心を抱くようになり、1990年代初頭に当時滞在中のモロッコのラバトで「スーダン研究センター」を設立。同センターは現在はエジプトのカイロに移って活動を続けているが、スーダン人自身の手になるスーダン研究の成果を精力的に公表する一方、これまで欧米や日本の研究者によって書かれたスーダン関係の著作をアラビア語に翻訳して紹介する作業もおこなっており、スーダンに関心を持つ人々の、国境を越えた対話・共同研究の場をささやかながら形成するに至っている。ハイダル氏は同センターの所長としての活動にかなりの時間を割いているが、一方で、近年は（スーダンで現在政権を掌握するに至っている）いわゆる「イスラーム主義」的潮流を徹底的に批判する研究（『政治的イスラームの危機』

1991年）でも注目されており、スーダンのみならず中東全体における政治と宗教の関係、民主化の展望、「市民社会」のあり方等の問題についても積極的発言をおこなっている。

1998年の来日は基本的には、上述の「イスラーム地域研究」プロジェクトと上智大学共催の「グローバル化と民主化」に関する国際シンポジウム（6月27日）に参加するためのもので、ハイダル氏は、現在の世界における「イスラーム主義」を「グローバル化」との関係でどう位置づけるべきかをめぐり、きわめて示唆的な講演をおこなった。日本では、マスコミ等で「イスラーム主義」＝テロリズムという短絡的なイメージが流布する一方、一部知識人の間には逆に、「イスラーム主義」的潮流は強権的な中東諸国の政府に対する民衆の抵抗運動、一種の「民主化」運動なのだ、という理解が存在するのであるが、（現に「イスラーム運動」が政権に就いているスーダンの出身である）ハイダル氏の講演は、このような理解に真っ向から疑問を呈するものであった。さらにハイダル氏は、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科で開かれた「イスラーム地域研究」プロジェクト研究会（6月30日）で「アラブ諸国における世俗主義（セキュラリズム）」の問題について報告し、ここでも「世俗主義」は所詮西洋からの輸入物であり、中東地域にはなじまない、といった通俗的理解に疑問を呈する、刺激的問題提起をおこなった。

### (2)

つづいて10月に来日したアフマド・スイキンジャ氏は、現在30代後半の歴史学者である。スーダン北部のヌビアの出身で、ハルトゥーム大学で学んだあと米国のカリフォルニア大学サンタ・バーバラ校で博士号を取得し、現在はオハイオ州立大学歴史学科で教鞭をとっている。スイキンジャ氏の学風の特徴は、自身は北部出身であるが、早くからアメ

リカに留学しカリフォルニア大で(南部スーダンの歴史研究で有名な)R・コリンズ等の指導を受けたことも手伝ってか、通常の北部スーダン出身の研究者に比べ、南部スーダンへの目配りがまいていること、またスーダンは(アラブであると同時に)アフリカであるという認識が鮮明であることであろう。さらにもう一つの特徴として、やはり欧米で勉強した影響か、社会史的視点が、他のスーダン人歴史家の場合よりも自覚的に追求されていることも挙げられる。氏のこのような学風は、南部スーダンを扱った『英統治下の西部バフル・アル・ガザール州』(1991年)、また北部スーダン社会における(南部やヌバ山地出身の)奴隷の運命を扱った『奴隷から労働者へ:植民地支配期スーダンにおける奴隷解放と労働』(1996年)などの業績によく表われている。

来日したスイキンジャ氏は、まず、「イスラーム地域研究」プロジェクトの一環として開催された国際ワークショップ「中東・アフリカにおける奴隷エリートの比較研究」(10月10～11日)に参加し、「戦友か捕虜か—トルコ・エジプト軍における『スーダーニー』奴隷」と題する報告をおこなった。19世紀スーダンにおける奴隷兵士(ジハーディーヤ)に関しては最近幾つかの興味深い研究が現われているが、たとえばその中のリチャード・ヒルらの研究がジハーディーヤのマムルーク(イスラーム世界における奴隷軍人の伝統)との連続性、一定の「エリート性」を強調する傾向を持つのに対し、スイキンジャ氏の報告はジハーディーヤがあくまで「奴隷」として蔑視され、搾取されていた側面を強調するものであった。また、南部・ヌバ山地出身の「黒人」奴隷を中心に軍を建設するという19世紀当時のエジプト当局の政策が一種の「人種」概念によって支えられており、これがのちに英植民地当局によって継承されて(特定の人種が特定の労働に適しているという概念に基づく)「人種政策」に発展していく、という興味深い指摘もなされた。

ついでスイキンジャ氏は、国立民族学博物館地域研究企画交流センターで開かれた「イスラーム地域研究」プロジェクト研究会(10月14日)にも参加し、「スーダンの鉄道労働者における社会的ネット

ワークと連帯:1924～48年のアトバラのケースから」と題する報告をおこなった。報告の冒頭でスイキンジャ氏は、中東・アフリカにおける労働史研究の重要性を指摘した上で、「労働史=労働組合史」であってはならない、として従来の研究史の欠陥を指摘し、「普通の労働者」の生活に迫り、「労働者」を歴史的・文化的文脈に位置づけなおす作業の必要性を強調した。ついでこのような視点に基づいて、鉄道網の要衝に位置し、20世紀のスーダンの労働運動の中心となってきた「鉄と火の町」アトバラの歴史が具体的に分析され、英植民地行政の戦略、「労働者」と出身農村の絆、労働者クラブや雑誌等を介しての「労働者文化」の形成の問題、等の論点が提示された。総じて、中東・アフリカ史の双方にわたる視野の広さを持ち、また社会史的手法の導入によって「奴隷」「労働者」等のテーマに従来とは異なる角度からの接近を試みているスイキンジャ氏の来日は、「現代イスラームの動態的研究」に携わるプロジェクトのメンバー全体に大きな刺激を与えるものだったように思われる。

周知のように、1989年のクーデタで現政権が成立して以来のスーダンはきわめて困難な状況に置かれており、人権弾圧・飢餓・ジェノサイド、はたまたアメリカによる空爆など、スーダンから入ってくるニュースには暗いものが多い。こうした中、半亡命状態という困難な状況下でも国際的に注目される活発な研究・言論活動を続けているハイダル氏、あるいはスーダン出身ながらアメリカの大学で教鞭をとり、欧米における中東・アフリカ研究の発展に実質的に貢献しつつあるスイキンジャ氏のような人々が存在することは、われわれスーダン研究に携わる者たちにとって大きな励みである。スーダンの状況は厳しいが、同国の良質の知識人を代表するとも言える両氏の来日は、スーダン研究の新しい風を、ひいては現在の閉塞状況が打開されたのちに建設されであろう「新しいスーダン」の息吹をさえも、仄かに感じさせてくれるものだった。

(くりた よしこ 千葉大学)